

第十五講 西洋文化史（7）の総括と講評

本講はオリエント世界に対する近代人の考えを問うた。近代の初め、西欧の知識人たちが知っていたオリエントの歴史は古代ギリシア・ローマ人の著作を通じて得られた異質な他者性というイメージと、聖書（とりわけ旧約聖書）を通じて知った傲慢で臆病なオリエントの専制君主像によって彩られていた。その古典的教養と彼らの東方世界に関する知見が重ね合わされ、近代独特のオリエント像が形成されていったのである。「偉大な古代文明」と古代の段階で停滞してしまった近代のオリエント社会、そして上は一国の王や皇帝から下は地方の役人に至るまで国民から膏血を搾り取るだけの腐敗し切った支配者層というステレオタイプ化したオリエント観が近代西欧の知的エリートを支配したのである。そしてそのオリエント観が西欧諸国の帝国主義を正当化するのに利用されたのであった。本講では先ずこのオリエント観の伝統と問題点を講義した。

次いで、オリエントという言葉でまとめられてしまう世界の多様性を論じた。どうしてもティグリス・ユーフラテス川流域のメソポタミア平原を想像してしまいがちになるが、シリアやパレスティナなどの地中海沿岸地域、小アジア内陸部にあるアナトリア高原、イラク北東部のザグロス山脈の周辺地域、イラン高原北部地域や南部地域、さらにはナイル川流域など、気候条件も地理的自然環境も全く多様であり、広大で乾燥した大平原を灌漑によって農業に利用するといったイメージではまとめられないということを指摘した。さらにこのような多様性は現代においても顕著に認められることも講義において考察した。

その上で、農耕文化の起源の問題を取り上げ、氷河期以降の自然環境の変化が近東地域における経済に大きな影響を及ぼし、その変化に対応する人間の戦略として農耕そして牧畜が生まれてきたことを論じた。同時にレバノン山脈とアンティ・レバノン山脈に遮られたシリア・パレスティナ地方の空間的な狭小性が、この地域の発展に障害となったことを論じ、より規模の大きな経済圏・政治的集合体を構築する舞台がメソポタミア地方に広がっていたことを考察した。

本論はシュメール人、アッカド人、そしてアムル人の歴史か

ら構成された。特に重視されたのはシュメール人などの都市国家・社会をどのように見るのかということに向けられた。マルクスやウェーバー、ダイメルやシュナイダー、ジェイコブセンやディアコノフなどの説を紹介・検討し、政治文化的には近代のオリエント観とは整合しないことを指摘した。農業として利用される空間の狭小性、小家族的な形態をとる家族社会、兄弟間の均等分割、広範囲に見られる契約慣行、都市の自治機能、広域に広がる交易網などをタブレット史料や法典などを通して論じた。

小レポートは授業の冒頭に計 13 回行なった。ある場合には事前レポートとして諸君の知識を問うものや、またある場合には諸君が家庭での学習をどの程度行なっているのかを確かめる復習的なもの、またある場合には授業と同時進行で講義について問うものなど色々なパターンでレポートを課した。そして提出されたレポートに関して、毎回授業の冒頭で講評を行い、レポート課題の意図を説明し、レポートから明らかになってくる諸君の学習上の問題点や長所を指摘した。

また諸君の学習の一助となるため、さらには大学での授業を広く一般に公開するために本学のホームページ、「オープンコース」に教材を提供している。

さて、第十四講で行なった諸君の学習と知識、問題対象に対する考察力を確かめる調査結果をこれから講評する。社会という言葉に注意して欲しい。この言葉は人と人の関係を基礎として構築される構造物を指しており、成員間で帰属意識が共有されることによって凝集力を持ち、何らかの役割分化によって成員間に階層分化が生じる。社会は外部との接触によって自己意識を高め、他者との区分を行う。また社会に根差すそれぞれ固有の文化や規範を作り出し、成員の間で秩序を維持し、世代を越えて持続される経験の蓄積が行われる。社会の小さな単位としては家族があり、村や町のような地域的な広がりを持つものや部族や民族のようなより大きな社会もある。

今回の調査では社会という言葉がこのような意味内容を持っているということをよく考えた上で答えてもらいたかった。ほとんどの回答が社会という言葉の意味内容をあまり考えていな

かったように思われた。

寄せられた回答の中には「オリエント」の定義から始めるものが散見される。大事なことは西欧の知的伝統の中でギリシア以来長く「オリエント」が常に「オクシデント」と対照的に扱われて来たという処にあるのだろう。ここで論じなくてはならないのは「オリエント」が「オクシデント」と根本的に異なった世界だったのかということにある。

地理的特徴に触れる回答も随分見られた。しかし回答の多くがオリエント世界の地理的多様性を指摘しているが、実際にはメソポタミアを想定するものであって、高温乾燥・平坦な大地・灌漑農耕という3つのキーワードでまとめられている。塩地化の問題にも随分触れていたが、その為の住民の組織化などに言及できていない。

初期王朝期のラガシュを中心とする興亡史から、アッカド帝国やウル第三王朝の歴史、アムル人の台頭とバビロン第一王朝、というメソポタミアにおける政治史を概観する回答も目についた。しかしこれはあくまでも社会を論じる背景でしかない。政治史の記述に時間を取られて社会についてあまり触れることの出来なかった回答もあった。

シュメール人の法典やハンムラビ法典などを使ってオリエントの社会を論じようとする回答も多かった。封地を介した王と兵士の関係を論じてみたり、法典に現れる家族の問題を扱ってみたり、地主と借地人の関係を考察したり、このようなアプローチ法は首肯できる。法という側面から見た古代オリエント社会の一断片を明らかにしようという意図を読み取ることができる。

古代オリエントの社会についての研究者たちの学説を辿ろうとする回答もあった。マルクスやウェーバー、ダイメルやジェイコブセン、ディアコノフなどの名前が紹介されていた。こういった研究史を整理しておくことは必要である。

粘土板史料などから身分構成や宗教、契約慣行に言及するものもあった。しかしながら全体としては概説的記述に終わってしまっていて、何が問われているのかにうまく答えきれていなかったと評価される。